ミガワリ×プリンセス

十季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ミガワリ×プリンセス

【Ｎコード】
Ｎ５７７３Ｃ

【作者名】
十季

【あらすじ】
連れ去られた先は、見たことのない別世界――。「お姫様として生活するなんて絶対無理！」

プロローグ

――ごめんなさい――

……誰？

――私は自由がほしいの。だから――

だから、何？

――あなたの自由と引き換えに、私は自由を手に入れます――

……え？　何それ。どういうこと？

――あとはお願いします。私にそっくりなあなたに――

第1話

「ん……夢？」
清家るいは自室のベッドで目を覚ました。
今日はいつになく変な夢を見たような気がする。
枕の横に転がっている目覚まし時計に目をやると、丁度午前三時を過ぎたところで針が止まっていた。
やった、二度寝できる――。
……あれ？
朝方三時にしては外が明る過ぎるような……。
時計の針と明るさに違和感を感じて、ベッドの側のクリーム色のカーテンを引いた。
窓の外には綺麗な空。
憂鬱（ゆううつ）な雲はひとつもなくて。
うん、今日もいい天気だ。
枕元のケータイを手に取り、メールチェック。
これはもう習慣になっている。
他県で暮らしている両親との連絡手段だ。現在ひとり暮らし。
高校入学を期に買ってもらった、サクラ色のケータイ。
この四ヶ月で既（すで）に手に馴染んでいる。
緩（ゆる）い曲線で囲まれた液晶画面を覗（のぞ）き込んで、ボタンを操作する。
その時、画面右下に小さく表示されている小さな数字――現在の時刻――が目に入って、るいはベッドから飛び起きた。
やっと気付いたのだ。
今が午前三時過ぎではなく、七時四八分だということに。

いつもわたしが家を出るのは八時過ぎ。
あと十二分しかない。

自分史上稀(まれ)に見る速さで着替えを済ませ、荷物を持って階段を駈け降りる。
洗面所に着くと、歯を磨き、軽く髪を整える。
今日は髪括(くく)る時間ないな……。
いつもは高い位置でひとつに纏(まと)めているセミロングの髪に軽く触れる。
学校に着いたらなんとかしよう。
適当に何本かヘアゴムをポケットにしまい、家を飛び出した。

第2話

民家がすっぽりと入ってしまいそうな大きな部屋。
細かな装飾が施された繊細な窓枠から差し込む光が、真っ白な壁をオレンジに染めている。
俺はため息をつく。
「明日(あす)だというのに……。姫はどこにいるんだ？」
俺は明日に結婚式を控えている。
その相手は、隣国、アリウスの第二王女、ルイ・アリウス・ミュラー。
彼女は姿を消してしまった。
隣国ということで、幼い頃からよく会っていた。……というよりも、見ていた、の方が正しいかもしれない。
父であるローシェル国王に連れられて、アリウスを度々(たびたび)訪れていた。
ルイは俺より二つ年下だが、そうとは思えないくらい綺麗で、触れると壊れてしまいそうなくらい儚くて、小さかった俺は気恥ずかしさからか、お馴染みの挨拶をするだけで精一杯だった。
目が合った時の彼女の瞳は、朝露のように澄んでいた。
俺の途方もない質問に応えたのは、親友でありローシェルの宮廷魔術師長でもあるアレン・ウォルス。
「申し訳ありません。ルイ様はうまくご自分の痕跡を消されているようで、宮廷魔術師の半数を派遣しても見つからないのです」
宮廷魔術師といえば、国内の精鋭揃いだ。
そんな魔術師達の目を欺くには、桁外れな魔力と才能が必要だ。
それほどまでに、ルイは魔術に長(た)けているのだ。
ルイを連れ戻さなければならないが、宮廷の警備を考えるとこれ以上宮廷魔術師を派遣することはできない。
彼女の17歳の誕生日に結婚するという政略結婚にかこつけて、素直に気持ちを伝えなかったからか……。

しばらく黙りこんで目を伏せていたアレンが、顔を上げ言った。
「サリアス様、ひとつだけ結婚式に間に合わせる方法を思いつきました」
「っ！　本当か！？」
思わず大声を出していた。
アレンは構わず続ける。
「はい。しかし、今すぐに取りかからねば、間に合わないかもしれません。……許可をお願いします」
ルイが戻ってくるなら、手段などどうでもよかった。
「分かった。必ず間に合わせてくれ」
彼女が帰ってきたら、一番に伝えよう。
――幼い頃から抱き続けてきた、たったひとつの感情を。

第3話

いつも使っている通学路。
わたしは今、全速力で走っている。
今なら50メートル走のタイム上がりそうだなぁ、と現実逃避してみたり。
今日は髪をそのままにしてあるせいか、首にじんわりと汗が滲(にじ)む。
額から汗が滑り、ちょうど目尻のあたりから落ちていく。
周りから見たら泣いているように見えるかも知れないけど、そんなことを気にしている時間はない。
目の前の十字路を左に曲がれば、学校はもうすぐだ。
荷物の重さに足をとられそうになりながら、左へ曲がると。
視界に入るのは、大きなトラックと、その運転手さんのびっくりした表情。
近づいてくるタイヤの音とクラクションが、わたしの感覚を麻痺させる。
あ、わたし死んじゃう――。
そう思った時には、もう足も動かなくて。
ぎゅっと目を瞑った。
トラックに衝突。
そればかりが頭をリピートする。

……？
急に体が浮いたような気がした。
おそるおそる目を開けると、かなり下の方に道路が広がっている。
「え……」
死ぬってこんなにあっけないのかな？
軽く拍子抜けしてしまった。
「危なっかしいですね」

耳元で聞こえるアルト調の声。
向かい合うように抱きしめられているのに気づいて。
「なっ、何！？　放して！」
「落下してもいいならすぐにでも放しますが」
……それは困る。
死んだとはいえ落ちるのは怖いのでおとなしくする。
「あなたですか……。外見以外は何ひとつ似てないですね」
「て言うか誰ですか」
するとその謎人物は、失敗を隠す子どものように苦笑いした。
時々目の前をちらつく彼の髪は紺色だ。
太陽の光で、少し青っぽく見える。
「私はローシェルの宮廷魔術師長、アレン・ウォルスです」
名前が横文字、ということは外国の人だろうか。
ローシェルっていうのはアレンさんの出身地かな？
魔術師……んー、分からない。
あ、そっか。
「もしかしてアレンさん、天使、ですか？」
死んだわたしに触られるってことは生きている人じゃないってことだよね。
浮いてるし。
「そう見えますか？」
アレンさんは笑って続けた。
「そんな訳ないでしょう。あなたは死んでませんし」
「え！？　でもさっきトラックがぶつかってきて……」
「じゃあその場所にあなたの死体がありますか？」
思わず、ずっと下の方に目を向ける。
確かにそれらしいものはない。
「そろそろ腕が痺れてきたので行きましょうか。時間もありませんから。説明は後ほど」
腕の件（くだり）にカチン、ときた。

「ちょっとそれどういう意味ですか！？」

そう言ったのを最後に、わたしは意識を失った。

第４話

頭が痛い。
どこかにぶつけたような、でも本当はそうじゃなくて、奥の方が疼くような……とにかく変な痛み。
そっと目を開けると、夕方と夜の境目にいるみたいな、少し青みがかった優しいオレンジ色が広がっていた。
一瞬、外にいるのかなって思ったけど、よく見たら全然違っていた。
寝そべって見ているだけでもわたしの部屋の１０倍はあるように感じるほど広い部屋だった。
学校に行かなきゃ、と体を起こそうとすると、ズキン、と頭に響く。
ちょっとでも痛みがマシにならないかと左手をこめかみに添えると、目尻のあたりにひんやりとした何かが触れた。
気になって左手に目をやると、銀色のキレイな指輪が薬指にはまっていた。
リングのラインに沿って、朝顔の蔓（つる）が支柱に巻き付いたような細かい飾りがついている。
「すごい……」
透明な紅と深い蒼の石が、何かの模様を描いて溶け合うようにひとつになって、指輪の中央に乗せられている。
思わず見入ってしまうほどの存在感。
「あ、お目覚めになられたんですね！」
「えっ！？」
後ろを振り向くと、１５歳くらいの女の子がこちらを見つめていた。
「もう時間がありませんのでお急ぎ下さい。」
「えっと、何？　ここ……。あ、あの、誰ですか？　学校行かなきゃ」
その女の子は心配そうに顔を覗き込んできた。
瞳はきれいな碧だ。

「そんなに強く頭を打ってしまわれたのですか！？　今すぐに医務官を呼んで参ります！　……ぬぁっ！」
勢いよく走り出したが、すぐに何かにぶつかってしまったようだ。
「クレア、もう少し落ち着いたらどうですか」
「申し訳ありません！　お怪我はございませんか！？」
ここからはその様子は見えない。
あの子、クレアっていうんだ。
……じゃなくて。
わたしがなんでこんな訳の分からないところにいるのか聞かなくちゃ。
「あの……わたし学校に行かなきゃいけないんですけど」
すると、クレアはわたしが見えるところまで戻ってきて、目に涙を浮かべてわたしを見た。
「ルイ様が先ほどからおかしなことをおっしゃるのです！　ですから医務官を呼びに行こうとしておりました！」
クレアがぶつかったらしい人物もこちらへやってきた。
彼は紺色の髪をしている。
前に会ったことがある気がする。
「ルイ様は大丈夫ですから、水を持ってきてください」
紺色の彼が言うと、クレアは小さく頷（うなず）き、部屋を出ていってしまった。
真っ黒な瞳が私を捉えた。
吸い込まれそうってこういうことなんだ。
きっと、こんな目は漆黒とか言うんだろうなぁ。
「ルイ様、記憶が消えてしまわれたのですか？」
「消えたというか、急に知らないところにいたというか……。」
「思い出してください。あなたはこれから結婚式に出席されるのです」
なんだかいい加減腹が立ってきた。
「誰の結婚式だか知らないけど、遅刻しちゃうじゃない！」

「ルイ様の結婚式ですのであなたがいなければ困ります」
「そんな訳ないよ！　まだ１６歳だし、彼氏すらいないし……」
自分で言ってて悲しくなる。
どうしよう。ちょっと涙目になっているかも知れない。
紺色の彼は静かにわたしを見ている。
この人のこと、確かに知ってるんだけどなぁ。
そして、ふいに思い出してしまった。
「あー！　アレンさんだ！　わたし事故に遭いそうになって……」
すると、アレンは不思議そうに首を傾げた。
「気づいてしまいましたか。完全に記憶を入れ換えたはずなんですけどね。まあ仕方がありません」
そう言って、アレンはこちらに近づいてきた。
逆光で顔が影になって、怖い。
「何ですか！　あ、もしかしてあれですか。誘拐ですね！　わたしの家にはなんにもないですよ！」
「誘拐などと低俗なことはしませんよ。ただ少し、清家るいという“器”をお借りしたいのです」
「“器”？　どういうこと？」
いつの間にかアレンはわたしの目の前に椅子を持ってきて腰掛けていた。
「まあ、はっきり言えば体だけあれば充分なのですが、なかなかそういう訳にもいきませんから。るいさんにはルイ様の身代わりとして生活していただきます」

第5話

「実は、今日この国の王子と結婚されるはずだった隣国の姫が逃走されたのです。名前はルイ・アリウス・ミュラー」
椅子に座ったまま、勝手に語り始めたアレン。
なんだか長くなりそうな予感。
「それで、なんでわたしなの？」
「あなたが姫に非常に似ているからです。中身は姫とはお世辞にも言えませんが」
つくづく失礼な人だ。
もうこんなことに付き合ってられない。
「じゃあ絶対わたしには無理。帰る」
立ち上がって出口へ向おうとする。
よく分からないけど、困ってるみたいだし、謝ってくれるかも。
一歩一歩扉へ近づいていく。
しかし、アレンには焦る様子もない。
そして一言。
「家には、帰れませんよ」
「えっ、どうして？」
驚いて足が止まる。
振り向くとアレンはこちらを見つめて言った。
「ここは清家るいが住んでいた世界ではありません。ルイ・アリウス・ミュラーの代わりにあなたをこの世界へお連れしたのです」
そしてわたしの左手に目をやった。
「万が一あなたが何らかの方法で逃げ出そうとしても、その指輪がある限り不可能です。術をかけておきましたから」
「指輪なんかとっちゃえばいいんでしょ」
指輪を抜いて、アレンに投げつける――――はずだった。
「えっ！？　何これ、とれない……」

わたしの様子を見て、薄く笑みを浮かべるアレン。
「無理ですよ。それは私にしか外すことは出来ません。」
アレンはゆっくり椅子から立ち上がって言った。
「姫が帰ってくるまで絶対に帰しませんから」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5773c/

ミガワリ×プリンセス

2011年1月1日02時24分発行